

## § 参加者報告 §

# 本当の平和



<ファットマン>



郡山市立日和田中学校2年 續橋 明日波

## 1 研修への参加に当たって

曾祖母から霞ヶ浦海軍航空隊で神風特攻隊として戦死した友人の話聞いた。そこから大東亜戦争について詳しく知り、広島と長崎にB29から原子爆弾が投下されたことを知った。大勢の罪のない人々が亡くなったことを知り、とても悲しかった。戦争体験者が少なくなっていくなかで、語り継いでいかななくてはならないと思い今回の研修に参加した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 原子爆弾「ファットマン」

この写真は、長崎に投下されたプルトニウム型原子爆弾「ファットマン」のレプリカである。「ファットマン」とは、「太っちょ」という意味で、実物大で、直径1.52m、全長3.25m、質量4.5tの大型爆弾である。しかし、放射性物質を出すプルトニウム部分はわずか9cmしかないのだ。たった一発で多くの人々が亡くなり、今も放射能の影響で苦しんでいる人が多くいる。このことを思うと、原子爆弾の力は恐ろしい。だが、この大戦後、核兵器の恐ろしさが知れ渡ったにも関わらず、1986年には世界の核兵器の数が64,449発にも及んでいる。だんだん核兵器の数は減ってきているが、まだ13,000発以上もの核兵器が残っている。しかも新しく核兵器を作っている国もある。

核兵器がなくなるために、そして人類が自ら破滅へと向かっていかぬように核兵器の悲惨さを訴えていく必要がある。

### (2) 被爆体験講話

被爆者の体験を聞いたが、恐ろしく、言葉が出なくなった。頭のない人、目玉が飛び出ている人。そんな人々がたくさんいたという。私の曾祖母は高齢になり、普段の生活

では記憶が曖昧なときも多いが、郡山空襲のときや、当時の軍歌ははっきり覚えている。戦争はとても大きな影響を与えたのだと思った。

### (3) 平和祈念式典

私は平和祈念式典を見て、核兵器をこの世からなくしたいという想いが強くなった。日本だけでなく、世界の国々からも来賓の方々が参列しており、日本を、長崎を最後の被爆地にするという強い想いが伝わってきた。しかし、核保有国すべての国が参列していたわけではなく、参列されたのは核保有国の一部のみであった。これからの時代を担う私たちが、世界にも核兵器の廃絶を伝えなければならないと思う。

## 3 研修に参加して感じたこと

3日間の研修で学んだことは貴重な体験となった。今回の研修で原子爆弾の悲惨さや、平和の尊さについて深く知ることができた。

当たり前となっているこの平和は、戦争でのたくさんの犠牲の上に成り立っているということを忘れてはいけないと思う。本当の平和が実現されるために私たちが語りついでいかなければならないと思った。

# 平和な世界へ



<平和の泉>



郡山市立行健中学校2年 近藤 ななみ

## 1 研修への参加に当たって

私は、1945年8月9日長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていたが、原子爆弾により長崎が甚大な被害を受け、多くの命が失われたという事実を詳しく知らなかった。今回、平和推進事業があることを知り、戦争や核兵器について学べる機会だと思い、参加を申し込んだ。

研修への参加が決まり、これまでの疑問を調べてみると、長崎の被害状況が見えてきた。原子爆弾「ファットマン」が投下されたことで、7万人の尊い命が失われ、長崎が甚大な被害を受けたことを知った。それは、私にとって非常に衝撃的な事実だった。「この歴史的な事実を風化させず、同世代の多くの人や後世の人々に伝えていこう。」そう決意した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 平和の泉について

上の写真は、平和公園にある平和の泉である。その中心には、9歳の少女の手記が刻まれた石碑がある。「どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と書かれている。数千度を超える熱線で全身を焼かれ、水を求めて苦しんでいることが分かる。周りには油の浮いた水しかなく、それを飲むしかなかったのだ。被爆者は、「水を、水を」と叫びながら亡くなっていった。この事実は、想像を絶し私に強い衝撃を与えた。原子爆弾が落とされなければ、このような形で亡くなってしまふ人はいなかったと思う。たった一発の原子爆弾により、多くの尊い命が一瞬にして奪われてしまった。世界には、この恐ろしい原子爆弾が現在約1万3千発以上あるといわれている。核兵器が世界にある限り、真の平和とは言えない。いつか、核兵器がなく幸せて安全な日が来ることを願っている。

### (2) 原爆資料館

原爆資料館には、原爆が投下された11時2分で時間が止まった柱時計、熱線によって溶けてしまった瓶や鍋の蓋などが展示されている。原爆被害の様子が映された写真は、目をそむけたくなるほどの酷い惨劇だった。長崎原爆の被害状況図によると、爆心地から半径1キロ以内がもっとも酷く全壊全焼していた。原爆投下によって、多くの人の命と未来への夢や希望、大切な街や豊かな自然が奪われた。

福島県も2011年3月11日、東日本大震災の後に福島第一原子力発電所で事故が起きた。この事故によって、現在も避難生活を余儀なくされている方々がたくさんいる。

核兵器、原子爆弾は本当に恐ろしい。「二度とこのような事を起こしてはならない。」と、多くの人に伝えていきたい。

### 3 研修に参加して感じたこと

平和推進事業に参加し、実際に被害に遭われた奥村さんの話を聴いた。彼女は当時8歳だった。

「原爆が投下された直後、強烈な光と爆風に襲われた。気が付いて目を開けると、隣にいた友は既に息絶えていた。自分の皮膚も焼けただけ、周辺は焼け野原になっていた。水を求めさ迷い歩く人々が大勢いた。9人いた家族の中で生き残ったのは自分だけだった。」

この話を聴き、私は胸が締め付けられ、涙がこぼれそうになった。

被爆者の方々の平均年齢は、現在80歳を超えている。今回、話を聴くことができたのは、とても貴重な体験であったと思う。

平和推進事業を通して学んだことを、まずは周りの人々に伝えていく。そして、「戦争を二度と繰り返してはいけない。」ということを、多くの人に知ってもらいたい。平和で明るい未来を創っていくのは私たちの役目であると、改めて心に誓った。

# 伝えるべきこと



＜原爆を落とされた長崎の様子＞



郡山市立明健中学校2年 松本 桜里

## 1 研修への参加に当たって

私は学校の社会の学習で長崎が被爆地だった事は学んでいたが、実際にどのような被害があったのか、詳しい情報は知らなかった。そこで今回のピースフォーラムに参加し、被爆当時の長崎の様子を知り、家族や友達に広めたいと思い、参加を決意した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

私は初めて長崎の街並みを見た。本当にここに原子爆弾が落とされたのだろうか、と目を疑うほどだった。

### (1) 被爆体験講話

被爆当時8歳だった被爆者の方の話を聞くと、原子爆弾が落とされた時の出来事を想像できる。

長崎に落とされた原爆は日本語で「太っちょ」という意味の「ファットマン」。長さは想像していたものよりも小さい3.25メートルだった。こんな小さなものが一瞬にして長崎の美しい街を破壊してしまったのだ。被爆地の資料を見ると、投下前は建物がたくさん並んでいたが、投下後は跡形もなく消えていた。この爆弾で亡くなられた方は73,884人。重軽傷者は74,909人。これは長崎市全体のおよそ三分の二である。

そして被爆者の方々は投下後の放射線にも苦しめられたという。放射線を浴びた人々は吐血や、下痢、脱毛に悩まされた。それだけではなくガンや白血病になるなど命の危険も出てきた。やはり被爆者の方の高齢化も進む中で我々が戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさを伝えていかなければならないと話を聞いて改めて感じた。

### (2) 意見交換会

3日目は、全国の人とZoomでの意見交換だった。そこ

で話題になったのが「自分が平和だと思うこと」だった。私は毎日学校に通えること、友達と笑顔で話せること、好きなものが食べられることだと思う。なぜなら、戦争中は食べ物も水も充分にとれなかったため、今食べ物や水が食べられることは平和だと思ったからだ。他にも部活を精一杯出来ることや、家族と喧嘩できることなど普段の生活で幸せに感じている人が多いと思った。

## 3 研修に参加して感じたこと

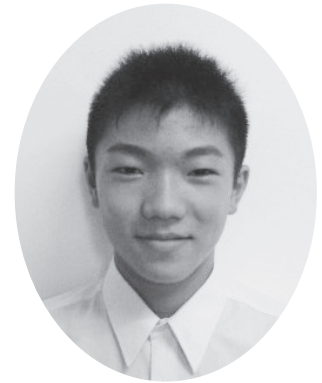
この3日間はあまり体験することのできない貴重な機会だったので、参加し平和について考えられたのはいい体験だったと思う。

私が今回の体験で大切だと感じたことは「戦争の悲惨さ、平和の尊さを次の世代へ伝えること」だ。戦争を二度と繰り返さないためには、戦争の記憶を消すのではなく、それを次の時代へと受け継いでいくことが大切なのではないだろうか。私は今回学んだ事を家族や友達に広めたり後輩に教えたりしたいと思う。

# 平和はひとつの笑顔から



〈悲しみの上に立つ像〉



郡山市立安積中学校2年 近藤 圭悟

## 1 研修への参加に当たって

社会の授業で耳にする言葉がある。それは、「原爆」そして「長崎」この二つだ。この言葉を深く掘り下げていった先に、世界の平和を見ることができないのではないか、と感じた。「平和とは何か」この疑問には様々な答えが出てくると思う。僕が平和だと思うのは、“大好きなサッカーがあたりまえにできること”である。なぜなら、好きなことができるというのは大きなキセキであるからだ。ひとつひとつのキセキが重なって今がある。だから、この事業で学んだことを伝えていきたいと思い、参加を決めた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 平和祈念式典

この事業に参加していなかったら、この式典をニュースで少し見て、ほかのニュースと同じように何気なく見ていたかもしれない。しかし、研修に参加したことで、長崎のことを知り、被爆者の話を聞き、意識して見ることができた。一つ疑問に思ったことがある。それは、今でも被爆の影響で、命を落としている方々がいるのに戦争がなくならず、現在も起こっていることである。被爆から時がたっている中で、戦争の記憶は薄れていくのではなく、書き換えていければ良いと感じた。この写真は、式典の様子である。この場に行けなかったのが残念だが、誰もが同じ気持ちで式典を見ていると考えると、ひとつになれた気がした。

### (2) 被爆体験講話

被爆者が年々減少している中でこのような経験は貴重だと思った。被爆者の言葉で心に残っている言葉がある。それは、「平和の原点は人の痛みを知ること」である。たしかに痛みを知ることによって優しく強い心を持つことができると思った。実際に被爆した方の話は、写真や書物では伝わ

らないものがあると感じた。この講話で心に残ったことは、一生語り続けなくてはいけないということだ。

そして、大切な命を人の手で奪うことはいけないと、強く感じた。

## 3 研修に参加して感じたこと

この事業に参加し、戦争や原爆について詳しく知り、自分の考えを共有できたことで、いかに現実を伝えることが大切かを感じることができた。この地球上ではこのような活動が行われている隣で、戦争が続いている。被爆者の体験を聞き、戦争を身近に感じることで、戦争に対する意識が変わる。ひとりでは変えることはできないが、伝えていくことでつながり、本当の平和な世界ができていくのだと強く感じた。研修に参加して、身近な人に伝えたいことは、「今があるのは、過去があるから」ということだ。だから、過去に感謝しながら今を生きていきたい。

# 平和な世界を目指して



〈被爆後の浦上天主教〉



郡山市立安積第二中学校2年 渡邊 莉子

## 1 研修への参加に当たって

研修前の私は、長崎については歴史で習った「出島」があることやカステラが有名なこと、そして、世界で二番目に原子爆弾が落とされた街であることくらいしか知らなかった。

学校で夏休み前に先生から伺い、興味が湧いた。今回私は長崎に投下された原子爆弾の被害、そして、どうしたら世界から核兵器がなくなるかについて深く学び、考えたいと思い、この事業に参加した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 浦上天主教

この写真に載っている崩れたレンガ造りの聖堂。この聖堂は「浦上天主教」といい、長崎のキリスト信者達によって建設された。ここに使われているレンガは彼らが一つひとつ積み重ねたものだ。そんな聖堂も、たった一発の原子爆弾によって、一瞬で変わり果ててしまった。私はこの写真を見て、改めて原子爆弾による被害がどれだけの大きさか思い知った。これほど恐ろしい兵器の何十倍もの威力を持つ原子爆弾が世界に何発もあると考えるとぞっとする。

長い時間をかけて造られた大変美しいものも、家族の絆も、いつもの日常も、何もかも私たちから奪ってしまうゲンバク。こんなにも惨い兵器をこれ以上増やしてはならないと思う。

### (2) 平和の泉

この泉の前にある石碑にはこう刻まれている。

『…のどが乾いてたまりませんでした  
水にはあぶらのようなものが  
一面に浮いていました  
どうしても水が欲しくて

とうとうあぶらの浮いたまま飲みました

———あの日のある少女の手記から』

この子の他にも、沢山の人が同じような思いをしている。あるいは、もっとひどいかもしれない。彼らの死から私たち人類は、多くのことを学ばなくてはいけない。

## 3 研修に参加して感じたこと

私はこの研修に参加する前は、戦争は国同士で喧嘩をし合い、破壊の限りを尽くすことだけで何も生まないと思っていた。しかし、研修に参加して沢山の「平和の種」が見つかることが分かった。「平和の種」とは、「この過ちを二度と繰り返かえしてはならない」という人々の強い想いであり、戦争の記憶である。

被爆された方々の今の平均年齢は80代を超えている。このままでは、戦争の記憶が忘れ去られてしまい、真の「平和」は訪れないだろう。だから、私たちは想いを次の世代へと繋いでいかなくてはならない。今回の研修で学んだことを家族や友達などの身近な人に伝えよう。もうこれ以上、戦争を起こさないために、私たちが今から「平和の礎」を築かなければならない。

# 平和への一歩



〈平和の泉〉



郡山市立逢瀬中学校2年 石井 愉那

## 1 研修への参加に当たって

今回事業に参加しようと思ったのは、原爆の学習を通して平和について考えを深めたいと考えたからである。

原爆によって多くの被害を受けたり、たくさんの方が犠牲になってしまったりしたことは、テレビなどで耳にしていた。だが、核兵器を無くすことや平和については、あまり考えたことがなかった。この事業について先生から話を聞いたときに「平和について考える良いチャンスかもしれない。」と思い、参加を決めた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 平和の泉

一番心に残ったのは、平和の泉の石碑を見た時だった。その石碑には「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と刻まれていた。私はこの石碑を見て、胸が締め付けられる思いがした。この手記を書いた少女は、どんな気持ちで水を探し回っていたのだろう。精神的にも、とても辛くなって油の浮いた水を飲んでしまったのだと感じた。

私はこの石碑を見て、もう二度と戦争をしてはいけないと強く思った。原爆や戦争によって苦しみながら亡くなった人も多い。そういう辛いことが、二度と起こらないようにするために私たちはこのことを周りの人たちに伝えていかなければいけないと思った。

### (2) 青少年ピースフォーラム

今年は、新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの開催だった。被爆体験講話や平和学習、意見交換会などが行われた。特に印象的だったのは、全国各地の方々との意見交換会だ。一人ひとり意見や思いが違い、自分自身の

考えと照らし合わせながら意見交換ができた。話し合いの場にいた全員が平和について真剣に考え、自分の意見も深めることができた。

## 3 研修に参加して感じたこと

この3日間、原爆と平和について学習し、仲間と一緒に考え、たくさんを学ぶことができた。

これから私たちが平和な世の中にしていくためにも、今回学んだことを周りの人たちに伝えていかなければいけないと強く感じた。たった一発の原子爆弾が、多くのものを一瞬で奪ってしまうこと。原子爆弾による被害は、想像しているより遙かに大きく悲惨だということを多くの人に伝えて、平和な世の中への一歩を踏み出せるようにしていきたい。同時に、核兵器もこの世界から無くなることを強く願う。世界にはまだ核兵器は存在している。このようなことが二度と起こらないようにするためにも、核兵器ゼロの世の中になってほしい。

そのために、まず自分自身から平和への一歩を歩みだそうと心に誓った。

# 平和への想い



<焼け奪われた日常>



郡山市立片平中学校2年 吉田 太樹

## 1 研修への参加に当たって

夏の入道雲を見ると、原爆のきのこ雲を想像することがある。今年の夏もそんなことを思いながら過ごしていた。僕は、その頃ちょうど今回の事業の話を目にし、自分が知らないことを深く学べるチャンスだと思った。さらに従兄弟が広島に住んでいて、原爆について少なからず関係はあるだろうと思った。最終的に、「平和とは何だろうか」という問いに答えを出すために参加を希望した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 焼け奪われた日常

僕がこの研修で一番印象に残った写真は普段の生活が一変した様子を展示したものである。中が黒焦げになった弁当箱や、カスガイが張り付いて溶けた瓦など、日常が原爆によって破壊された様子を見て、原爆がすべてのものを壊してしまう恐ろしさを改めて感じた。

### (2) 青少年ピースフォーラム

8日の被爆体験講話では、オンラインとは思えないほどの気持ちが伝わってきた。原爆は音もせず強い閃光を放った後、物凄い爆風が街の景色を一瞬にして奪った。講師の方は、家族を見つけたときには言葉が出なかったそうだ。そう思うと家族という存在はとても大切で、かけがえないものなのだと思う。

9日には、全国の中学生と意見交換を行った。平和とは何か、などの問いがあった。僕は「毎日普通に暮らせること」と答えた。他にも普通にご飯を食べられることなどの意見があった。意見交換によって新しい考え方を見つけることができた。

### (3) 平和祈念式典

僕は、初めて真剣に式典を見た。オンラインだったが緊張感がとてもあった。被爆者、長崎市長その他さまざまな方が参列していた。

長崎平和宣言や平和への誓いなども聴くことができた。そして8月9日午前11時2分原爆で亡くなった方々に黙とうをした。この黙とうは長崎を原爆最後の被爆地にする、二度と戦争などしないという、死没者への想いが込められていると思うと、とても重く感じた。そしてどれだけの尊い命が奪われたかを強く感じた。

## 3 研修に参加して感じたこと

3日間の研修を通して、原爆の悲惨さや怖さそして「平和」の大切さ、命の尊さなど、たくさん学ぶことができた。次は、自分は学ぶ側から、伝えていく側にならないといけないと思った。「戦争をしてはいけない」という言葉の本当の意味を知ることができた気がする。

今は、新型コロナウイルスと関連して笑顔が少ないと思う。本当の平和が来てこそ笑顔が広がると思う。100%平和は難しいが、それに近づくことはできると思う。

最後に今回の郡山市平和推進事業で学んだことを、平和のために後世のためにも伝えることが、僕の本当の平和への想いだ。



# 76年の月日を経て



＜少年平和像＞



郡山市立喜久田中学校2年 熊田 梨々花

## 1 研修への参加に当たって

「長崎」と聞いて、すぐには原子爆弾が思い浮かばなかった。社会科の授業で長崎に原子爆弾が投下されたことを学んでいたが、体験したことがないからか、今も想像がつかない。そのようなイメージよりも、桃山文化でオランダから伝わった「カステラ」や、江戸時代の「出島」など、活気のある、生き生きとした県というイメージが強い。これは、私だけでなく、周りの友達なども同じだと思う。この事業を通し、長崎のこと、戦争のことについて学び、私も伝えていかなければいけないと思い、この研修に参加することを決めた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 少年平和像

この像は、昭和26年8月8日に建立され、戦争、原爆ですべてを失った城山小学校の児童が平和を希求して立ち上がる姿を象ったものである。この像が、当時小学5年生で両親を原爆で亡くした少年をモデルにしていると知り、驚きよりも悲しみが大きく、息が詰まった。私に、同じ小学5年生の妹がいるため、どうしても重ねてしまい、まだ幼い小学生の小さな胸いっぱい広がる大きな苦痛は、私には計り知れないものだと感じ、私もまた胸が痛んだ。

台座の「平和」の文字は、1年生の時に被爆した当時小学6年生だった菅原耐子さんが、家族をまつつてある仏壇の前で練習して書いたものだという。このことから、幼くしてあった悲劇から立ち直ろうとする強い想いを感じ、文字からは、菅原耐子さんだけでなく、たくさんの子供たちの平和を繋げようとする姿勢がみえた。そして、平和の尊さを伝える大切さを改めて感じた。

### (2) 平和公園

原爆落下中心地北側、小高い丘にある平和公園は、悲

惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと、世界平和への願いを込めてつくられた公園である。

数あるモニュメントの中でも、ひときわ大きな存在感を出している、「平和祈念像」は、長崎市の平和への願いを象徴する高さ9.7メートル、重さ30トンの像である。天を指した右手は“原爆の脅威”を、水平に伸ばした左手は“平和”を、横にした足は“原爆投下直後の静けさ”を、立てた足は“救った命”を、軽く閉ざした顔は“原爆犠牲者の冥福を祈る”という想いが込められている。この像からは、長崎や平和を想う人々の折れない気持ちと、当時の長崎の悲惨な状況が覗えた。私は、心から日本が最初で最後の被爆国であることを願う。

## 3 研修に参加して感じたこと

長崎に原爆が投下されてから76年がたち、被爆者の平均年齢が年々上がり、あの日起きたことを体験した人が少なくなってきた。今、原爆について知っている人はどれ程いるのだろうか。私は、周りで原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを考えたことがある人はあまりいないと感じる。もし明日、一瞬にして家族、親戚、友達が奪われてしまったら、家や思い出が詰まった場所が消え去ってしまったら、それは言い表すことのできない苦痛で、私は耐えることができないだろう。そのため、二度と同じことが繰り返されぬように、あの日の出来事を伝え続けなければいけない。悲劇にあった人々の「平和への願い」を受け継ぐことが、今を生きる私たちの使命だと、研修を通して感じた。

# 私たちが伝える



<平和の泉>



郡山市立熱海中学校2年 小山 陽生

## 1 研修への参加に当たって

最近、イランがアメリカとの核合意に違反して、ウランの濃縮を始めたというニュースを耳にした。このことからわかるのは、今でも、核を持っている国が、この世界中にはたくさんあるということだ。この日本には原爆の被害を受けた場所が2か所ある。ひとつは広島、そしてもうひとつは今回研修をした長崎だ。私が、今まで知っていたことは、「長崎に原爆が投下された」、「長崎は原爆でとても悲惨な状況になった」という2つの事実だけだった。原爆のさく裂した時の様子や、原爆の被害の実態といったことは、何一つ知らなかったのである。よって、学校で募集があった時、これは戦争について、学びを深められる絶好の機会だと思い、この研修に参加しようと決意を固めた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 事前学習会・青少年ピースフォーラム

この写真は、平和公園内にある、「平和の泉」だ。その泉には、石碑があり、それには、

『のどが乾いてたまりませんでした

水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました  
どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま  
飲みました

—あの日のある少女の手記から』

と刻まれていた。これは、当時、9歳(小学4年生)だった山口幸子さんが書いたものだそう。原爆の熱線で体内まで焼きただれてしまった少女は水を求めて探し回ったが、どこの水も油のようなものが浮いていて、とても飲めるような水ではないのに飲んでしまったという、今の世の中なら到底考えられない事実である。今、私たちが当たり前のように蛇口をひねれば出てくるきれいな水を飲むことができることは奇跡で、平和あってこそその日常なのだ、と

いうことを実感した。

## 3 研修に参加して感じたこと

今回の研修に参加して、私は、もう2度と核兵器による人々の殺傷がないように、家族や友人など身の周りの人や、学校のクラスメイト、先輩や後輩などにも伝え、「長崎を最後の被ばく地に。」このことが、50年先も100年先も、続いていくことができるようにしていきたい。フォーラムで、皆が言っていたことは、「原爆・戦争の記憶を途切れさせたい。」ということだ。原爆投下時3歳だった方も、今年で79歳になっている。また、被ばくした方々の年齢層もあがっていて、その数も減りつつある。だから、私たちが大人になるころには、被ばく者の方々もお亡くなりになられ、「私は被ばくを体験した。」という方がいなくなる。したがって、私たちの子孫には、「私たちが伝えなければいけない。」ということだ。「私たちが伝えなければ忘れてしまう。」と言っていたフォーラムの方々や、被爆者の方々の気持ちが分かった気がした。また、新型コロナウイルスがおさまったら、現地へ行き、今回聞いたお話を思い出しながら散策して、実際に被爆したものを、タブレットの画面越しではなく自分の目で確かめたいと思う。

# 戦争のない平和な世界へ



<平和の泉の石碑>



郡山市立守山中学校2年 折笠 颯

## 1 研修への参加に当たって

研修前の私は、長崎といえばちゃんぽんやカステラが有名なことや、出島があることくらいしか知らなかった。戦争のことについては、「1945年8月9日に長崎に原子爆弾が投下された」という事実は知っていた。だが、原子爆弾による長崎の被害などについては全く知らなかった。私は戦争のことについてほとんど無知だった。そんな時にこの事業のことを聞いた。私は、戦争の恐ろしさや、命の尊さについて深く考えてみたいと思い、この事業に参加することを決意した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### 【 ある少女の手記 】

上の写真は平和公園の平和の泉にある石碑だ。

石碑には

「のどが乾いてたまりませんでした

水にはあぶらのようなものが

一面に浮いていました

どうしても水が欲しくて

とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

—あの日のある少女の手記から—

と、刻まれている。私はこれを見たときとても驚いた。特に「油が浮いたまま飲んだ」というのがとても衝撃的だった。「油が浮いている水」なんて今の日本では絶対にありえないからだ。今の日本では当たり前のようにきれいでおいしい水が出てくる。だが、原爆投下後は、それは当たり前ではなかったのだ。原爆の影響で体が焼けるような熱さに苦しみ、水を求める人がたくさんいた。だが、汚染された水を飲んでしまうと、体の中に放射性物質が流れ込んで死んでしまう。当時の状況は最悪でしかなかったのだ。この手記を書いた少女が水を求めて苦しんでいる様子を想像し

ただで心が痛くなる。もし自分がその場にいたら…と考えると自分は絶対に耐えられないと思った。

戦争は平和など生まない。絶望しか生まないのだ。

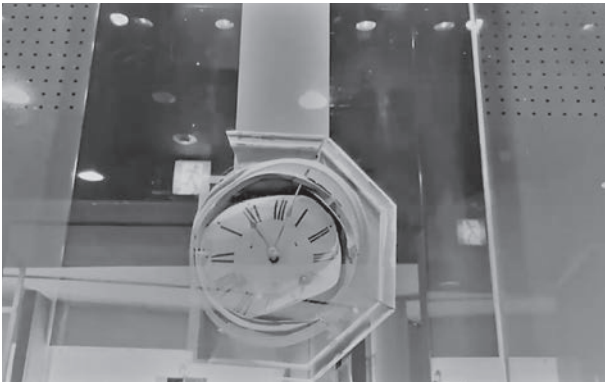
今の平和な世界に感謝して、いつまでもこの平和な世界が続いてほしいと思った。

## 3 研修に参加して感じたこと

今回の事業を通して戦争の恐ろしさや命の尊さについて深く考えることが出来たので良かった。今までは平和について考えることはなく、ただ何となく生活してきた。だが、この事業に参加して、今当たり前前にできる事に感謝しながら生活するようになった。学校に行ける事、部活が出来る事、友達と話したり、遊んだりできる事。そんな当たり前のことが戦時中ではできなかったのだ。この事業で学んだことをこれから周りの人に伝えていかないといけない。そして、戦争のない平和な世界をこれからも持続させないとけない。それは一体誰の役目か。そう、これからの社会を担っていく私たちの役目だ。

この貴重な体験をさせていただいた方々に感謝し、これからも周りの人に伝えていって平和な世界を持続させていきたい。

# 平和への架け橋



〈11時2分を指して止まった柱時計〉



郡山市立高瀬中学校2年 芳賀 愛里咲

## 1 研修への参加に当たって

たった一発で、多くの人々の命を奪った原爆。私は、8月6日に広島へ、9日には長崎へと原爆が落とされたことは知っていた。しかしながら、戦争を経験したことがない私には、原爆が落とされた後の人々の生活の様子、原爆の威力などは想像もつかないものだった。

被爆された方々が少なくなる中で私にできることは何か。それは「伝える」ことだと考えた。実際に平和の大切さや原爆の恐ろしさを見て、聞いて、学び、それらを家族や友達に伝えたい。そして、これからは笑顔があふれる平和な世界になってほしい。これらの思いを実現するため、この研修に参加させていただいた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 原爆資料館

皆さんは、長崎原爆資料館に展示されている柱時計をご存知だろうか。上記の写真はそこに展示されている時計で、長崎に原爆が落とされた11時2分を指して止まっている時計だ。時計のフレームは欠けて文字盤を囲む部分は前に飛び出していることから、原爆の威力がどれだけ恐ろしいかが伝わってくる。

この11時2分に多くの人々が犠牲となった。生き延びた方々の中には、原爆の放射線により白血病やがんなどになってしまった人もいた。それだけでなく、原爆は被爆された方々の心に深い傷をつけたのだ。心の傷にはそれを治す治療薬はない。一生癒えることはないのだ。

何もかも奪い去っていった原爆。私たちは絶対に核兵器を使用してはならないし、新たな核兵器の開発は止めるべきだと強く思った。しかし、威力がある核兵器を持つことで自分の国を守るという考えから世界では核兵器が廃絶されないことが現状である。そのような中で、この柱時計は

核兵器廃絶と世界平和を訴え続けていると感じた。原爆で亡くなられた人々の思いがこの今に残された柱時計に込められているのだろう。

### (2) 意見交換会

全国各地の中学生や長崎ピースボランティアの方々とオンラインで意見交換をした。そこでテーマとして挙げられたのが「自分が平和だと思うことは何か」である。私は、家族みんなで過ごせること・学校に行くこと・友達とふれあうことなど当たり前の生活ができることだと思った。もし戦争が起きたらその日常を一瞬にして奪われるからだ。意見交換会では、自分と似た考えの人もいれば全く違う考えの人もいて自分の考えを一層深めることができた。

## 3 研修に参加して感じたこと

3日間の研修を通して、原爆の恐ろしさ、平和であることのありがたさ、長崎の核兵器廃絶や世界恒久平和への願いを学ぶことができた。

もう二度と同じ悲劇を繰り返さないためには、一人ひとりが核兵器の悲惨さや廃絶の必要性に目を向け、平和の大切さに気付くべきだと思う。また、この3日間の研修で学んだことを家族や友達に限らずたくさんの方々に伝えていきたい。そして、平和への架け橋にしたい。

# 被爆者の願い



<人々の心の支えとなったクスノキ>



郡山市立郡山第一中学校2年 木村 洸太

## 1 研修への参加に当たって

「1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下された」学校で学習し、その事実だけは知っていた。しかし、日本にどのような被害や影響をもたらしたのかはあまり知らなかった。

そんな中、私は、今回の事業についての話をいただいた。戦争・原爆について、漠然としたイメージを抱いている人はたくさんいると思う。研修に参加する前は、私もその一人だった。戦争体験者の話を聞ける最後の世代として、学んだことを伝えていきたいと思い、参加を希望した。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 人々の心の支えになったクスノキ

今回の研修は、新型コロナウイルス感染症の影響を考え、実際に現地には行かず、オンラインで行われた。この研修を通して最も印象的だったのは、上の写真のクスノキだ。山王神社の境内入口に根を下ろしている。この木も、原子爆弾による大きな被害を受けた。幹の上部は折れ、枝葉も吹き飛び、熱線で焼かれ、一時は枯木同然であった。しかし、被爆から約2か月後には新芽が芽生え、次第に樹勢を回復し、復活を遂げた。写真には、原爆の被害を感じさせない雄大なクスノキが写っている。このクスノキのたくましが、原爆の被害を受けた人々の心に大きな勇気を与えてくれたという。生きる気力も無くしかけていた人々に希望を与え、復興への原動力となったこの木を直接見ることは叶わなかったが、非常に感動させられた。この木には、たくさんの人々の「想い」が詰まっている。何よりも、もう二度と、戦争を起こしてはいけないという想いがいちばん込められているだろう。この想いを後世へと伝えていくことは、私たちの使命なのだと感じた。

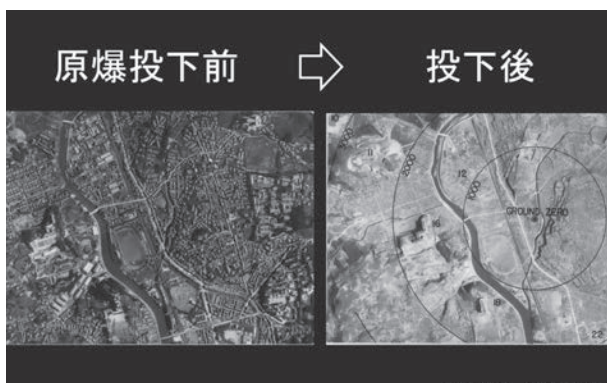
### (2) 被爆者からのお話

青少年ピースフォーラムにて、当時実際に被爆した奥村アヤ子さんのお話を聞いた。原爆投下直前までは、自由に幸せな暮らしをしていたという奥村さん。原爆投下とほぼ同時に、9人家族のうち自分一人だけが残されてしまった。午前中までは揃っていた家族の存在が一瞬で消え、一人ぼっちになる辛さは計り知れないものだろう。涙ぐみながら話す奥村さんをみていると、こちらも目頭が熱くなった。奥村さんは、「平和の原点は、人の心の痛みを分かること」とおっしゃった。これを一人でも多くの人に伝えていきたいと思う。

### 3 研修に参加して感じたこと

私はこの研修に参加する前、あまり戦争に対して真剣に考えたことはなかった、しかし、今回、実際に当時の状況を知る人の話を聴き、たくさんの人と交流したことで、平和の尊さをより深く知ることができた。現在、被爆された方々の平均年齢は84歳近くになっている。私は、被爆者の話が聞ける最後の世代として、被爆者の方たちの願いを伝えていきたいと思う。

# 破壊された長崎が私の心に創ったもの



<原爆が破壊したもの、それは…>



郡山市立第二中学校2年 岡部 理京

## 1 研修への参加に当たって

自ら見ようとしないと何も心には残らない、自ら聞こうとしないと何も心には響かない。この想いが、今回私が研修に参加しようと思った動機である。これまで戦争や原爆に関する事を見聞きすることはあったが、知った気持ちになっただけで、実際には何も心に残っていなかった。それでいいのか…。あの日長崎で、キノコ雲の下で、人間が人間に対して行った残虐な営みの実像を、自ら進んで知りたかった。原爆の悲惨さを、単なる数値や写真による把握だけではなく、実際に被爆を経験した人の話で学びたいと思った。そしてそこでの学びを、戦争や紛争のない世界をつくっていくことに生かす、それが次世代を担う私たちの責務だと考えた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

上に掲載した写真では、建物が消失したことがわかる。しかし、建物を吹き飛ばす原爆の威力ということがこの写真の本質ではないと思った。思いを馳せなくてはいけないのは、一瞬にして無きものにされたのは多くの人命ということだ。そこには人がいた、家族が暮らしていた、小さな赤ちゃんもいた…。被爆者である奥村アヤ子さんの話を聞いた。原爆が投下された後に奥村さんが目にしたもの、内臓が飛び出ている人、眼球がぶらぶらと垂れ下がっている人、川辺に折り重なる焼けただれた遺体。話を聞いて怖くなった。吐きそうにもなった。なぜこんなひどいことができるのか。奥村さんは9人家族だったが、原爆で自分一人だけになってしまったということだった。生き残ったかも知れないが、心は死んだのも同然だったのではないか。原爆が破壊したもの、それは建物だけではない、人の命、人の心、人間の尊厳だったということが、この写真が語りかけるものである。

## 3 研修に参加して感じたこと

今この時も、人々が殺し合いをしている現実がある。核兵器こそ使用されていないが、多くの人命が失われ続けているのが、この星で起きている紛れもない事実だ。先の大戦、長崎や広島で繰り返された悲惨な人間の業から、何も学び取っていないのだろうか。いや、私も学び取っていなかった、今回の研修に参加するまでは。長崎は原爆で破壊されたかもしれないが、今、私のなかに大切なものを創ってくれた。それは、平和を探求する心だ。大切なのは、地味かもしれないがこつこつと、戦争の悲惨さ、平和の尊さを学び伝えることだと教えてくれた。長崎と他のまちが交流を持ち、これから社会を担う10代の若者が学び考える、こういった活動こそがまさにそれなのだ。参加しただけで終わるまい。友に伝える、大切な人に伝える、そして未来の私の子どもに伝える、それが今、私が心に誓うことである。

# 伝える使命



＜多くの人がここで平和を祈っている＞



郡山市立郡山第三中学校2年 大竹 英

## 1 研修への参加に当たって

戦争は二度としてはいけない。核兵器を保有し、使用することは危険なことだ。私は小学生の時に戦争について学習した。長崎に原子爆弾が落とされ、多くの罪のない命が奪われたことを知り、今自分が何の不自由も感じずに幸せに生きているのがどれだけ平和なことかを実感した。戦争や原爆を経験していない私たちにはその地獄のような状況を想像することしかできない。今の私はその状況を想像できるだけの知識を持っているだろうか。そう思い、研修への参加を希望した。また、今を生きる私にできることは、過去の戦争の実相を知り、多くの人に伝えることなのだという思いを持って臨んだ。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) 平和を祈って

城山国民学校は、爆心地から西方500mの場所にあり、最も爆心地に近い国民学校であった。上の写真は、原爆が投下されてから6年後の1951年8月8日に城山国民学校の生徒が平和を希求して立ち上がる姿をかたどって建設された少年平和像である。この少年は当時5年生で、5歳の時に父母を亡くしてしまった。私は、いまの自分よりも小さな少年が何とか命を取り留め、懸命に生きようとする様子を想像して胸が締め付けられた。現在は、城山小学校の生徒が登下校時にこの像に拝礼をしているそうだ。私もいつかこの像の前に立ち、平和を祈る一員として心から拝礼をしたいと思った。

### (2) 家族を大切にしていますか？

「自分がひとりになったらと想像してみてください」被爆者の奥村アヤ子さんは私たちにそう呼びかけた。奥村さんは爆心地に近い場所で8歳の時に被爆した。9人家族の中

で一人生き残り、家族全員が助かった親戚の家に引き取られて生活していたそうだ。思い出したくもない原爆の実相を、今、私達に伝えてくださっている。私が今もしひとりになったら、生活することもできず、孤独に苦しみ続けるだろう。苦しい状況を乗り越え、家族の大切さ、平和の尊さを伝えて下さった奥村さんの言葉を心にとめて生きていこうと思った。そして、奥村さんの家族や、多くの人の家族の命を奪った原爆、核兵器は絶対に使用してはいけないと改めて感じた。

## 3 研修に参加して感じたこと

この研修を通し、伝えるということの重要性を強く感じた。今に残る平和を訴える建造物や、次世代に原爆の実相を語り継いでいる被爆者の方々は二度と戦争を起ささないように全身全霊で伝えてくれている。この研修に参加した私たちが学んだこと、感じたことを多くの人に伝えることができれば、被爆者や戦争経験者でない多くの人たちも平和の尊さを知ることができるだろう。そのことを学んだ私は、これから平和な未来を築いていくために、伝えるという使命を果たすことを心に誓う。

# 二度とあの悲劇を繰り返さないために



<原爆投下の様子>



郡山市立第四中学校2年 村上 未来

## 1 研修への参加に当たって

自分が生まれる前に日本で起こっていた戦争。なぜ戦争が起こり、原爆投下に至ったのか？

広島と長崎の原爆の詳しい威力・被害の規模などは把握していなかったため、自分でインターネットを中心に調べてみた。すると、広島と長崎では自分の想像以上に威力や被害の程度が酷く、多くの人々が原爆によって苦しめられていたことに衝撃を受けた。そして、今でも核兵器を所有している国や、紛争が起こっている国もあるという状況に疑問を抱いた。

そこで、今回、戦争や平和についての学びを深める二度とない貴重な機会だと思い、中学校の先生からの勧めもあり、参加を決めた。

## 2 研修に参加して心に残ったこと

### (1) きのご雲の下で

長崎に「ファットマン」と名付けられた原爆が投下されたのは1945年8月9日。上空できのご雲を発生させると同時に、一瞬にして長崎を地獄の町へと変えてしまった写真である。一目で原爆の恐怖が伝わるインパクトのあるこの写真を僕は選んだ。

研修を通して、きのご雲の下の真実を知った。そこでは、一瞬にして長崎の街が廃墟と化し、私たちの想像を絶する地獄絵図のような光景が広がっていた。たった一つの原爆で、あのきれいな長崎の街と約7万人の尊い命が犠牲になったことに、これ以上ないほどの恐怖を覚えた。

### (2) 被爆者の講話

被爆者の体験談も強く心に残った。原爆により家族の殆どが亡くなり、ご自身も背骨にボルトを入れていると聞

き、とても衝撃を受けた。被爆者の方にとって、この体験談を語ることは辛いはずである。しかし、戦後76年を経て、戦争を体験していない世代が大半となった今、この体験談を語り継ぐことで、もう二度と同じ過ちを繰り返さずに、より良い未来を創って欲しいという強い願いが、ひしひしと伝わってきた。

そして、いつかは被爆者の方々がいなくなってしまうからこそ、僕たちは戦争の歴史についての正しい知識を身につけ、次の世代に伝えることが大切だと分かった。

## 3 研修に参加して感じたこと

歴史の授業で、太平洋戦争の中で広島と長崎に原爆が投下された事実を学んだが、今回の研修で被爆者の講話を聞き、戦争は自分の想像以上に悲惨だったことが分かり、今の生活がどれだけ幸せかということ再認識した。新型コロナウイルスの影響で、今回はオンライン交流となったが、いつの日か現地に行ってみ学したいと強く思った。

意見交換を通して、「平和だと思うこと(とき)はなにか」などの問いに対する、自分とは異なる意見なども取り入れ、新しい視点で考えることができ、貴重な体験になった。世界では、まだ紛争や戦争が起こっている。戦争は、すべての人から大切なものを一瞬で奪い去る恐ろしいものである。僕は、平和のために何が出来るかを考え、一人でも多くの人に伝えていきたい。